

## 「館内にいる人」

メタデータ	言語: ja 出版者: 武蔵野大学武蔵野文学館 公開日: 2024-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊池, 由希子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000357">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000357</a>

# 「館内にいる人」

菊池 由希子

ある日、ゼミでお世話になった土屋先生を訪ねたとき、むさし野文学館のスタッフをやらないうかというお誘いをお願いした。まだどのように運営・開館していくかも決まっていない状況で、「館内にいる人」という立ち位置と聞き、当時仕事を辞め時間に余裕があったわたしは、深く考えずに引き受けることにした。能天気引き受けたわたしはその後、ただ「館内にいる人」ではない形でむさし野文学館にかかわることになる。

わたしが主にかかわったイベントは、むさし野文学館の開館を祝して二〇一八年十二月に行われた「ワクワクことばのひみつきち」というイベントと、二〇一九年七月、卒業生に向けて文学館のお披露目をした「日文同窓会」の二つである。その後すぐに妊娠出産をし、現在は育児のため在宅でできる作業を行い、たまにイベントなどにスタッフとして顔を出す形でかわらせてもらっている。ここでは、先の二つのイベントを紹介しようと思う。実はこんな

こともやっているんだ、と興味を持ってもらえたらこんなに嬉しいことはない。

まず、「ワクワクことばのひみつきち」とは、当時の在学生が企画した子供向けの文学館クリスマスイベントだ。個人的にとっても楽しくて大好きだったイベントである。子供は入場無料、大人は二百円の入場料で誰でも参加可能、数多くの親子連れに大好評なイベントとなった（入場料は全額NPO法人児童虐待防止全国ネットワークへ寄付された）。

ブックトークや絵本の読み聞かせ、学生から集めた絵本・児童書と持参した本を交換するリユースで新たな本と出合える交換会、サークルとの協力による人形劇やクリスマスにちなんだ工作もありと、バラエティ豊かな内容である。子供たちが本に親しみながら楽しめるように、紅雲台をまるっと利用し様々な催しが行われ、楽しい空間を作り出していた。文学館内にある黒板を利用して自由にお絵描

きができるエリアもあった。また、折り紙サンタを胸につけたスタッフにある言葉を言う文字をゲットでき、全部つなげられたらプレゼントがもらえる、といったゲームもあり、子供たちは楽しそうに遊び、歩き、喋り、笑っていた。わたしはほとんどの時間を工作の手伝いに費やしたため、残念ながら他のイベントの様子はあまりしつかりとは見られていないが、真剣に絵本を見つめる姿や、わいわいと文学館でお絵描きや探検をする姿、恥ずかしそうに声をかけてくれる（光栄なことにわたしは折り紙サンタをつけていた）姿をほほえましく見守った。

わたしには現在三歳と一歳の子供がおり、文学館に連れてきたことがあるのだが、文学館という空間そのものが楽しいようで、不思議がりつつも滅多にできないロフト体験を含め楽しんでた。このイベントの際も、普段と違う場所での絵本の読み聞かせや様々な人との関わり、文学館という特別な空間は、子供たちにたくさん刺激を与えていたように感じる。天井までの本棚、おもしろい形の階段、棚の間が窓のように開いていたり扉になっていたり、長いはしごの上はロフトになっていたり、かくれんぼに最適なような、理想の秘密基地のような、文学館は子供心をもくすぐる異世界だったのではないかと思う。まさにイベントタイトルのように、文学館というひみつきちでことばと過ごす体験ができていた。

次に、「日文同窓会」について記したい。読んで字のごとく、日文の卒業生を対象とした同窓会である。文学館のお披露目も含めて、今後につながるよう交流を持たせるために開催された。共学になってからは初めての試みであった。紅雲台のロビー、二階の和室、9号館を利用し、教員やスタッフを含め五〇人ほどが参加してくださった。

ケータリングを用意し、飲食しながら雑談をする中、数名ずつ文学館の案内をしていった。貴重書や秋山先生の影を興味深く見たり、その空間の雰囲気を楽しんだり、どの参加者も文学館を堪能していたように思う。文学館が設立した経緯や、独特なデザインについての感動もあり、短い時間ながらも文学館の存在を印象付けることができた。

この同窓会ではひとつ参加者にお願いをしていることがあった。それは、おすすめの本を一冊選び、持ってきてもらうこと。各五人ほどのグループを作り、自分のおすすめ本を紹介し合い交換するという「本の交換会」を行ったのである。読んだことのない本やジャンルとの出会い、かつて読んだ本との再会、様々な本との出会いがあったのではないかと思う。そこに加えて、新しい本と出合わせてくれた人との出会い、同じ本や作者が好きな同志との出会いなど、本を通して人との出会いもあったのではないかと思う。好きな理由やおすすめのポイントなども人それぞれだけれど、でも同じ「本」が好きな者同士。どのグループで

も話に花が咲き時間が足りないほど盛り上がっていた。

さて、わたしが主にかかわった二つのイベントを紹介したが、残念ながらどちらのイベントも第二回を開催できていない。文学館の魅力をたくさんの人に知ってもらいために、また多くの笑顔に出会うため、次回の企画を練っていきたいと思っている。展示企画や摩耶祭で行った覆面本や文庫ガチャなどもあるが、こんな楽しいイベントもあるむさし野文学館、ぜひ一度遊びに来てもらえたら、とても嬉しい。